

生誕 110 年 日本画の巨匠「東山魁夷展」

京都国立近代美術館 2018.08.29～10.08 国立新美術館 2018.10.24～12.03

「東山魁夷」(1908～1999) は、戦争体験を通じて命のはかなさを強く意識し、自然風景の中に充実した生命を見出すとともに、その光景に謙虚に向かい続け、《道》や《残照》といった静謐で深い感情を湛えた風景画を描き、今回の展示作品「約 80 点」は、自然観や心情をも反映したものとして評価を得ている。

《緑響く》 1982 年 紙本彩色 信州・茅野市蓼品の農業用溜池がモチーフ

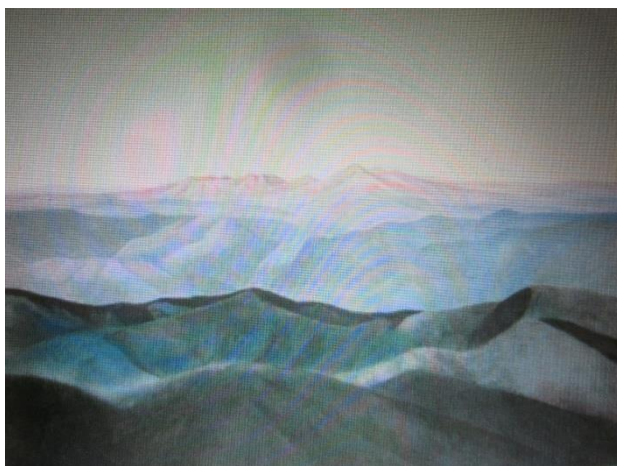


画伯の代表作で、液晶テレビのコマーシャルで広く知られるようになった絵画は、一頭の白い馬が緑の樹木に覆われた山裾の地畔に現れ、画面を右から左へと歩いて消え去る画面が美しく描かれている。

この作品は、穏やかなで控えめなため、主題が、「モーツァルト作のピアノ協奏曲第 23 番」の旋律が響いているのを感じさせると評価されている。

《唐招提寺御影堂壁画》 再現提示

東山芸術の集大成とされる作品で、構想から完成までに 10 年を要した記念碑的大作で、御影堂内部をほぼ間近にて鑑賞することができる作品である。



《残照》1947 年 紙本彩色



《道》1950 年 絹本彩色

君津市・鹿野山の冬枯れの山肌は沈鬱な茶褐色であるが、夕陽に彩られて明るい部分は淡紅色にと、影は青色にと明暗の微妙な諧調を織り交ぜている。(左)
盛夏早朝の八戸・種差海岸の草原で一筋の道を描いた作品で、遍歴の果てに新しく始まる道、絶望と希望が織り交ぜられた心の道とされている。(右)